

今号は「ハラスメント」に関する本を紹介します。ハラスメントに関する正しい知識を持ち、加害者・被害者にならないために予防・解決のためのヒントをみつけましょう。

※書籍右横の番号はセンターでの検索番号です。



マタニティハラスメント

2013年 宝島社新書
溝上 憲文 (著)

[700-2]

女性の「出産・育児」と仕事をめぐる大問題、それがマタニティハラスメント。本書が書かれた頃に比べ一部の企業では産休や育休も取りやすくなったかも知れないが、「マタハラ」は本当になくなったのか？

「マタハラ」の実態や当時のデータ、女性が知るべき「出産・育児」を応援する制度についても詳しく解説されている。今読んでも「変わってないな」と思うことがいっぱい。

「マタハラ」がなくなれば、少子化を食い止められるかも、と思うのはわたしだけ？ (ルナ)



家事労働ハラスメント

— 生きづらさの根にあるもの

2013年 岩波書店
竹信 三恵子 (著)

[700-2]

日本は、家事労働がないことになっている世界。男性が妻子を養うから女性の賃金は安くてもいいはずと抑えられてきた非正規の賃金。女性が担う「タダの仕事」と低賃金化された介護と保育。

国と会社で両立できる制度を支えるオランダや、税収の公的サービスで支えるスウェーデン等、他国の家事労働事情も取り上げている。

新型コロナウイルス感染症禍の中、ケアワーカーへの方針変更や近年の働き方改革の動きがあったが、日本はどこに行くのか。(ぽっと)



部長、その恋愛はセクハラです！

2013年 集英社
牟田 和恵 (著)

[700-5]

「セクシャル・ハラスメント」という言葉も概念も存在していなかった1980年代から長年、一貫してこの問題の研究を続けてきた著者が現在も絶えることのない被害の実態を本書でわかりやすく解説。身分の優位性を利用して起こるハラスメントは被害者の未来を閉ざし、人としての尊厳をも奪ってしまう。職場や学問の場で、男性上司の非常識な行動に苦しむ女性たちよ。立場上の困難を乗り越え、ジェンダーによる言葉の縛りからも抜け出して自分自身の人生を切り拓いていこう。可能性に満ちた未来があることを信じて。(みっと)



モラル・ハラスメント

1999年 紀伊國屋書店
マリー=フランス=イルゴイエンヌ(著)、
高野 優 (訳)

[700-8]

「モラル・ハラスメント (精神的な暴力)」という言葉が世に送り出したのが本書。世界20ヶ国以上で訳されている。著者は、精神科医で、精神分析学や被害者学も学んだ。理不尽に支配される側になり、そこから自分で抜け出せないうえ、悪いのは自分だと思いつける被害者。なぜそうになってしまうのかを、多くの症例を元に詳しく分析し、新しい言葉を定義した。

本書を手にとり被害者の視点から物事を見ていけば、職場や学校での「いじめ」の問題もより分かりやすくなると思う。(ルナ)